桐生川と利根川

── 日本河川名の語源について ──

工　藤　　進

真﨑先生が登場した頃，明学は……

真﨑先生は私より二年ほど先輩です。真﨑先輩が明治学院の専任になられたのはキャンパスがまだ学園紛争の「戦場」となっていた 71 年。私はその翌年の，闘争の余塵がまだ濃くくすぶっていた頃でした。二人とも同じフランス文学科に所属していました（当時のフランス文学科教員の半数は一般教育部にも籍があった）が，真﨑さんと学問上の話をした覚えはほとんどありません。

当時は科創設（65 年）からあまり経っていませんでしたが，65 年と 72 年の間には，全国で大規模な学園紛争がありました。それは 70 年の安保条約の継続問題（アメリカとの間に 60 年安全保障条約が結ばれ，十年後の 70 年にはこの条約を見直すことになっていた）と，産学協同（産業界と大学の協同）に対する世論の分裂を背景としていました。

異議申し立て者の多くは，急速にアメリカ化していく社会の中で，敵の姿も自己の位置も次第に見失い，反対するという行為自体に酔うだけになっていきますが，明治学院大学は当初，教員も加わっての闘争の激しさにおいて有名でした。

比較的小規模校だったこの学院ですが，学生にも教師にも純粋（過激？）派が目立つ傾向はその後も続き，三島由紀夫の自死に関与した「盾の会」の主要メンバーは明学生でしたし，丸の内の三菱重工ビルを爆破した者もこの学院に関係しています。

このような世相の中，創設後まもないフランス文学科内でもかなり深刻な意見の対立があったようで，私が仲間に入れていただいた 72 年には，特任教授として招かれていた東大名誉教授渡辺一夫はすでに去り，創立時に集められたメンバーのうち数人は他校に移っていました。

真﨑さんがこの時期をどのように見ていらしたのかはよくわかりませんが，同じように若かった筆者には，先生たちだけでなく学生も，キラキラと音がしていると思うほど輝いて見えたものでした。

当時の日本のフランス（文学）研究は，現在の中国の人のように，フランスの（文）学界にフランス語あるいは自国語で直接働きかけるというのではなく，フランスの文学や社会研究を日本語に翻訳した環境のなかでの，きわめて内向きな活動だった感じがあります。こうした研究方法は，遣唐使を廃止し，文化鎖国をしてからの中国（語）研究，また鎖国していた江戸時代における西洋研究に似ていて，なにか日本的宿命を感じさせます。

戦後のフランス研究全体も，戦争をはさんでほぼ四半世紀にわたるフランスとの，自由な形での交流が断絶していた影響がないわけはありません。こうした中で真﨑さんは，フランス文学科の中では数少ないキリスト教信者でした。

真﨑さんとの釣行

真﨑さんは現在もそうですが当時からアウトドア派で，暇があると釣りにでかけていました。真﨑先輩から聞いた科内のさまざまな考え方（彼は人の悪口を言わない人でした）をもとにして，私のなかにはフランス文学科の自分なりの地図ができていきました。彼は私をまず釣りの仲間にしようと考えていました。

こうして一時私は彼を師にして，釣り道具を揃えようとしたことがあります。腰までとどく長いゴム長靴（利根川などでこうしたものをはいた釣り人を何度も見かけた）を購入し，疑似餌針をふくめ様々な針の使い方，糸の「都会風」結び方を教わりました。

秋田と青森の県境にある十和田湖の近くに生まれた私は，川魚をとるのが好きで，米代（ヨネシロ）川の支流小坂（コサカ）川のそのまた支流をむかしずいぶん歩き回ったことがありますが(『釣りキチ三平』の著者，県南出身の矢口高雄は私とほぼ同年輩)，当時釣りは老人のやるものと思っていたこともあり，竿を用いる漁をした経験は多くはありません。

真﨑さんとの釣行でよく覚えているのは，那須岳の奥の三斗小屋温泉（栃木県）にある川（多分，那珂川の上流）に行ったときのことです。網漁派だった私は，真﨑さんの進言で買ったばかりのハイテク釣り道具を前にしてまごついていましたが，案の定，入川してまもなく，糸の先の針が狭い川にかぶさっていた木の枝に引っかかり，釣糸が切れてしまいました。再び新しい針と糸を竿に付けようにもうまくいきません。いらいらした私は，竿をもったまま川を伝って上流の真﨑さんのところまで修理をお願いに行きましたが，見つけた真﨑さんの，川面を見つめる真剣な表情は，正にとりつくしまがなく，針の交換など頼めるものではありませんでした。しかたなく私は宿に戻ってしまいましたが，彼の集中した表情には，クマも近寄れない，と思ったほどの鬼気がありました。二人ともまだ三十代の中頃です。

こんなことがあってまもなく，NHK ラジオの夜のエッセー朗読の時間に真﨑さんの作品を偶然耳にしました。釣りに関する，心に残る味わい深いものでしたが，彼はこうした，ご自分の専門に直接関係しない趣味を，大学の同僚には知らせていなかったようです。ラジオで放送された話が載った釣りのエッセー集を貰ったのはそのあとのことでした。私がラジオのことを真﨑さん自身に伝えなかったら，彼はその本のことをだれにも話さなかったのかもしれません。彼の文章には独特の品とやさしさとがあり，私は学生の卒論を評価した彼の文章を読むのが好きでした。

桐生川と桐生

真﨑さんと桐生に釣りに行ったのは，前橋の私の家に一緒に行った帰りだったろうか？　三人いた気がするが，もう一人，今となってはどうしても思い出せないのはやはり二人だったのかもしれない。東京から前橋へは，萩原朔太郎の頃は電車で六時間もかかったようですが，今から三十年前は，関越高速道がまだ前橋までも完成していなかった頃で，川越，東松山，熊谷，太田，伊勢崎を通って行く必要があり，三時間はかかりました。桐生は太田に近い町ですが，前橋から桐生へは古い道路が通っていました。

群馬大学（本部は前橋）で教えていた澁澤彰さんに頼まれ，私は桐生にある工学部に週に一回フランス語の授業に行ったことがありますが，それ

が真﨑さんとの桐生行きの前か後かはわかりません。

桐生川で釣りをしたのはある曇った午後で，真﨑さんからいろいろレッスンを受けたにもかかわらず私はぜんぜん釣れませんでした。真﨑さんも釣果はほとんどなかったはずです（いったい午後の早い時間に釣れるものだろうか？）。しかし帰りの車のなかで彼は上機嫌でした。途中，私のぶっきらぼう運転に耐えかねたのか，「疲れているようだから（運転）代わるよ」という言葉もありました。

前橋に家がある私は，県内で行ったことのある場所を地図で確かめるのが好きでした。関東平野の北限にある桐生という町は，前橋からちょうど 30 キロ，当時は車で 40 分ほどかかりました。前橋の東北には赤城山があり，この赤城山の頂上と前橋，桐生の三点を結ぶと，桐生の方に少し伸びた形の三角形を形成します。この一辺が前橋と桐生とを結ぶ古い街道ですが，旧石器時代が日本にもあったことを初めて証明した相沢忠洋の岩宿遺跡（笠懸村）が街道沿い，桐生近くにあります。この辺は，南に関東平野が広がり，西北に赤城，東北方向には足尾山地があって，ヒトの居住に旧くから極めて好都合な場所であったことがわかります。足尾山地に発して桐生市を北から南に縦断するこの桐生川は，今でも桐生市の水の主な供給源ですが，昔から居住環境の，すぐれた要件だったに違いありません。

「桐生」という川の名は，流域（この川の長さは 60 キロ弱しかない）最大のこの町の名から来ていると思われますが，逆にこの町の名自体，この古い川の名をとったものとも考えられなくはありません。ふつう，飲料水を供給してくれる川，あるいは泉の名は町の形成に先行しているからです。しかし，まずここで前者の説をとり，この「桐生」という美しい地名がどこから生まれたか，ということについて考えてみましょう。

古い地名はたいていそうですが，「桐生」の語源にもこれだという定説がありません。下野の佐野（栃木県）周辺を地盤とした藤原秀郷（平将門を討ち関東一円に勢力を広げる）の流れをくむといわれる桐生六郎の名から生まれた，という説があります。しかしむしろ，古い姓としては珍しいこの「桐生」という名前自体，出身地の地名「桐生」から生まれたとみるほうが妥当でしょう。

「桐生」という地名については，その漢字から，「桐の木の自生地」であるとか，「キリュウ（古くはキリフ）」という音から「霧生」（霧の発生地）という説があるようですが，両方とも民間語源の域を出ないように思われます。

地名語源の探索に有効な方法の一つに，同名の地名を求め，その地形的共通点を考えてみる，というものがあります。古形が見つかった場合はその生成過程がより明確になりますが，日本の場合は固有名詞の表記に，もともと意味をもつ漢字の音を万葉仮名式に用いるので，漢字名が地名本来の意味とはずれていることがよくあります。山中襄太『地名語源辞典』（校倉書房）には「キリのつく地名には，切，伐，桐，錐，霧，喜里，吉里などの字が書かれているが，当て字が多いから字義通りに解することは危険である。おそらく『切り開く』すなわち新開，新墾，新治の意味のキリが，地名のキリとしては最も多いであろう」という注記があります。ここでは「桐」の字が「切」「伐」という「断ち切る」という意味の語と結ばれていることに注目しておきましょう。

「桐生」（キリ・フと分けられるとした場合）のキリと発音される部分がこういう意味，つまり今の桐生が「新開地」のようなものだったとしたら，「新開地」命名の主体（本地，本領）があったはずです。それはどこでしょうか？

俗説では，「桐生」の名の起こりとされている在地の武士，桐生六郎の先祖は平安中期の武士，藤原秀郷（俵藤太）にさかのぼると言われていますが，この東国武士の祖とされる人物の本拠地は桐生市に隣接する足利・佐野荘です。実際，足利氏，佐野氏もこの藤原秀郷に系図の基を求めていますが，嫡流が当時の中央に幕府をはった足利氏，それに従って戦国時代を生き延びた佐野家に比べ，桐生家はあきらかに見劣りします。

しかしここでは，こうした中世の武家名が現在の地名・桐生のもとにあったと主張しようとしているのではありません。三家の系図上の収斂はむしろ，足利氏，佐野氏，桐生氏という，地名を名に背負った地方武士が，より強大な権力の名の下に一族を置こうとした試みの現れと解すべきでしょう。「新開地・桐生」に，「本地としての足利，佐野」を対応させるのは，地名発生からはるか後の歴史の展開を前提としている点で，時代錯誤と思われます。

東京堂出版の『古代地名語源辞典』（楠原佑介ほか）には「桐生」の項目はありませんが，現在の近江八幡市鏡に比定されるという「桐原」という地名があげられ，このキリについて「キリ（断）とは『崖地』のことか。（…）あるいは，キリは『限り』の意で，『端の地』，つまり『野原の端』か」とあり，また肥前の古代駅名の一つ「切山」について「キリ（断）は『崖』のことであろう。つまり『崖のある山』の意か。あるいは，キリは『限り』の意で，『山の端』を示した地名か」とあります。

この二つの地名辞典の著者によれば，キリには1）新開地，2）崖，3）野・山の端という意味が想定されます。さて「桐生」にはこうした意味のどれかがあてはまるのでしょうか？

飛騨高山には「桐生（きりゅう）」という町名があります。一丁目から八丁目まであるこの大きな町は，市の西北，富山方向に位置し，旧市街の北はずれにあります。高山は海抜560メートルを超える盆地のなかにありますが，町の中心にある城山，北山に近い町を除けば，地面は平であり，凹凸はあってもはっきりと目立つものではありません。この「桐生町」のキリに上の三つの意味のどれかがあてはまるとすれば，それは「新開地」でも，「崖」でもなく，「（町の）端」ということになるでしょう。つまり「端町」です。

「限り（カギリ）」という語は，カ・ギリ（カ・切リ）と分けられると私は考えています。（「限り」の）ギと（「切り」の）キは上代特殊仮名遣いでは二つとも同じ甲種であり，語源的に同じものであった可能性があること，また「限り」のカ（ア列音に甲乙はない）は指示的カであり，指示詞コ（乙）に対応すると考えるからです。古代で二種の音韻があったとされるオ音では，指示詞コ（乙）に対しカ，指示詞ソ（乙）に対しサ，格助詞ノ（乙）に対し古い格助詞ナというように，乙オ列音対ア列音の対応が見られます。そうすると，「カ・ギル」は「アソコ（で）切る」というような意味になり，「クギル（区切る）」に関係します。カ，クの母音交替形である「クギリ」，「カギリ」は「切り」が共通項ということになります。

桐生（キリュウ）は，名詞的なものである連用形「切り」から生まれた終止形（キリ・ウ）かも知れません(1)。「ヒトが黙る（の）を見て」とか「跳ねるはウサギ」と言えるように，終止形が，本来名詞である連用形とは違う意味で名詞的に用いられることは珍しいことではありません。存在動詞wu（居）の万葉集（1912歌）の例，「立つとも坐（ウ）とも」のウも名詞的に用いられた終止形です。キリ・ウのウはリが前にあるので，ル

とはならずにフとなり，「祝ふ，乞ふ」が「祝う，乞う」になったように子音ｆは消滅し，「キリフはキリウ」になったという想定です。よく用いられる動詞の方は「キル」となり，固有名詞の方は古形が化石化して残ったということになります。

桐生はまた足尾山地の「端（限り）」でもあり，関東平野の「カギリ」でもあります。高山の桐生町は，町を流れる宮川の東岸にありますが，群馬県の桐生も，町の南西を赤城方面から流れてくる渡良瀬川の東北岸に位置しています。桐生川は渡良瀬川にほぼ沿って南に流れ，桐生市に隣接する足利市（栃木県）で合流し，名前を「渡良瀬」にゆずります。

「桐（きり）」という喬木は上代から知られていました。三省堂の『時代別国語大辞典（上代編）』では，上に述べた上代特殊仮名遣いに現れる音韻の違いは「桐」のキに関しては明記されていませんが，辞典に示されている平安時代の和訓例によれば，「桐（キリ）」表記に用いられている「支（キ）」「岐（キ）」は万葉仮名では甲類に分類されるものです。山中襄太『地名語源辞典』では，地名語根の一つキリが表すものとして断（切，斬），伐，霧，桐，錐があげられていますが，上代特殊仮名遣いによれば，錐，断（切，斬），伐のキは甲キ，霧のキは乙キで異なり語源が違うと考えられます。群馬県は上代特殊仮名遣いが行われていなかった東国であり，さらに地名が文字表記されはじめたのはこうした書き分けがすっかり失われた時代ですが，「桐生」に「断，切，斬」につながると思われる「端，限り」が想定されるとしたら，「霧生」語源は成り立たちません。

河川名の語尾としての「川」とは？

いずれにしても「桐生（川）」という名はもともと，この河川（とその流域）を指したものであり，桐生という，できあがった町の名前から来たものではないでしょう。河川名は元来このように，流域，地帯を指したので「信濃（シナノ）」，「千曲（チクマ）」，「利根（トネ）」というように，元来「川」という語なしで用いられたと思われます。河川名語源研究の醍醐味は，「川」や沢や谷，アイヌ語のナイやベツといった「川」と同義の語を除いて残ったものの意味の解明です。

「川」という語尾なしで用いられているいくつかの例から，河川名形成のパターンが浮かび上がってきます。まずアイヌ語では，河川名がナイとかベ（ツ）だけで終わることがあります。しかし北海道では河川名としての「ルテンベツ」が「ルテンベツ沢」，「ニオベツ」，「ヌビナイ」が「ニオベツ川」，「ヌビナイ川」というように日本語化され，アイヌ語語尾（ナイ，ベツ）の意味が忘れられていきます。ナイ，ベ（ツ）は日本語の「川，沢，（ときには谷）」を指し，さらに川の流域全体をも表わしていました。

アイヌ語が浸透していた東北北部では，河川名として，アイヌ式の「相内（アイナイ）」，「宇樽部（ウタルベ）」がある一方，日本語語尾の「沢」や「川」を付けた「相内沢」，「宇樽部川」も使われています。田沢湖の近く，岩手県境の一例「シトナイ沢川（この場合の語根は「シト」のみ）」からは，東北北部では急速にアイヌ語語尾の意味が理解されなくなっていったこと，また，もともと東では川やその流域を指していた「沢」が，「川」とはすこし違って受け取られるようになってきていることがわかります。

秋田県では，川を表す語尾としてはカワとサワがほとんど拮抗して用いられ，タニ語尾は私の簡単な調査では皆無でした。一方，岐阜県では，小

河川名の語尾としては，サワは皆無，代わって，タニがカワと拮抗しています。高山市の郊外に「越後谷（エチゴダニ）」という名の川（峡谷）があり，群馬県には「越後沢」という名を持つ山[(2)]もありますが，秋田県の県北には大川目沢（オオカワメサワ―語根はメのみか）という名の川（沢）があったりするのはこういう傾向を反映しているものです。サワとタニのこのような分布は日本語の形成構造と関係しているに違いありません。

「谷」とは何？

白川静の古語辞典「字訓」によれば，「泉出でて川に通ずるを谷と為す－『説文（解字）』」とあります。中国では「谷」は必ずしも急峻な地形ではなく，「水の分かれ出る場」を指したようです。「谷」には水の存在は不可欠でしたが，しだいに単に「空洞」も指すようになりました。飛騨のホラ（洞）のつく地名は，群馬県などにみられる，水に必ずしも関係しない地形的な「谷」を表しているのではないかと思います。ホラを「谷」，あるいは「谷間」の意味で用いる地方は飛騨地方に限らず，小学館の『日本方言大辞典』によれば，常陸，秋田，八丈島，神奈川津久井，山梨，長野，静岡，愛知北設楽，三重，滋賀彦根など，八丈島を除き，奈良時代東山道と呼ばれた地方，及びその近隣に見られます。

東北北部にはヤツ，またはヤチ（「谷地」と表記）と呼ばれる沼沢地（セリやドジョウなど，昔の食物の宝庫）があり，秋田県小坂町では「大谷地（オオヤチ）」という地名としても用いられています。私は，この「ヤチ」を長いあいだ，沼沢地を意味する標準的な普通名詞とばかり思っていたので，アイヌ語（yaci ヤチ＝泥，沼沢地，湿地－柳田国男ほか）であるらしいと最近知って驚きました。私の感覚では，ヤチはたとえ盆地にあっても肝腎の部分は平坦であり，深い凹みを想定させるタニとはかなり違ったものです。江戸時代の方言集『物類称呼』を著した越谷吾山は，自分の名前にも用いられている「谷」という語についてつぎのように言っています。「谷　たに。関西にて　たにと称す　黒谷くろたに鹿谷しゝかたにのたくひ也　相州鎌倉及上総辺にて　やつと呼　扇か谷亀か谷等なり　江戸近辺にて　やと唱ふ　渋谷しぶや瀬田谷せたがや等也」（八坂書房）。秩父，千葉，横浜，白石（福島）には谷津（ヤツ）という名の川があります。

「渋谷区鶯谷町」の，アイヌ語風，谷（ヤ）と，西日本風，谷（ダニ）という二つの読みは，漢字「谷」の日本での受容の柔軟性，多様性を示すだけでなく，この国がどのような要素から成り立っているかを想像させるものです。地名は先祖の考え方，暮らし方，価値観を詰め込んだものですが，こうした古人の感性そのものであり，郷土愛をはぐくむ無言の教材である古い地名を廃し，現在の人間の価値観，方針だけに従って，世田谷（瀬田谷）はまだしも，西東京市，南アルプス市という地名を案出する人々…もまた，今のこの「美しいクニ」の内実を表しています。

河川を表す語尾として日本のなかでは，ナイ，ベ（ツ），沢，川，谷，そして古いものとして，瀬（渡良瀬，広瀬），淵（馬淵，早淵），津（中津，大津）などがありますが，「ルテンベツ沢」や「庄内川」のように，川をあらわす違った語尾が重ねて用いられる理由は，アイヌ語と日本語が混淆したような地方では容易に想像がつきます。つまり理解できなくなってきたもの（例えばアイヌ語のナイ，ベツ）に日本語で理解可能な語尾（サ

ワ，カワ）をつけて明確化しようとしたにすぎません。

カワという語は，残存した方言形（カー，ケー，コー，ハー）とその意味「泉，井戸，池，用水路，用水桶，海，大水」（『日本方言大辞典』小学館から要約）から推測できるように，もともと流水というより，むしろ滞留している水を意味していました。イカー，あるいはイガワは西日本の広い地方では井戸のことを指しますが，このカワは流水ではなく，静水を指すものであることは明らかです。古代において，飲用水は存在が重要なので，その水のあり方（川か，泉か，井戸か，池か）は本質的なことではなかったに違いありません。しかし言葉はこの水のあり方，という本質的ではないものをさまざまな形で彩るのです。カワ（水）は，日本ではとくに内陸に多い流水（つまり「川」）だけに用いられたために，この語はそれまで「川（とその流域）」を表していた既存の語（沢，谷，瀬，淵，津，アイヌ語圏ではナイ，ベツなど）と競合し，こうした語に無用と言える意味の特化・住み分けを強いることになりました。

群馬県を中心に，新潟，長野，岐阜，富山にまたがる山岳地帯の小川名を，語幹に注目してアトランダムに集めてみたことがあります。総計 83 河川集まったものを，今度は語幹ではなく語尾で分類してみたら「川」が 41「沢」が 22,「谷」が 20 でした。おおざっぱな調査ですが，この東山道中部において，小河川をあらわす語尾は「沢」と「谷」がほぼ拮抗し，この二つの語尾（計 42）で「川」語尾の数（41）と競り合っていることがわかります。前に述べたように，秋田県にはサワはあってもタニはなく，岐阜県ではタニは用いられてもサワが用いられることはありません。日本ではサワとタニが東（北）と中央とでは一方が他方を排除する形で分布されています。

この計算には低地を流れる大河川は入れません。低地の河川の多くは比較的名の知られた大川が多く，こうした河川にはほとんどすべて，「川」語尾がつくことは分かりきっているからです。川としての「沢」や「谷」が海にいたるまでその名を保っていることはほとんどありません。「川」による，その他の語尾（ナイ，ベツ，サワ，タニ，セ，フチ，ツなど）の浸食はすすみ，古い語尾は後退しているのです。

「日川」は Hi-River か？

中央高速道は笹子トンネルの山梨県側で，日川（ヒカワ）という名の川を横切っています。標識には以前 Hi-River とあり，みるたびに，妙な表示だ，と思っていましたが，最近は Hikawa-River と変えられました。日川という川は実際ありますが，日川は川だけをあらわすのではなく，むしろ一般には日川と呼ばれている地域名のことです（有名な日川高校がある）。こうして川がついただけでは川とは認識されない場合があります。

Hikawa-River は意味としては「日川川」ということになります。群馬県には須川川，横川川，神奈川県には中川川というように，川が二度繰り返されているものがあります。これは，もともと水源地帯を指したものかも知れない須川（＝ 酸川。酸性水），横川，中川という旧名が，そこから流れ出ている川を表すものとは感じられなくなり，地域名として化石化してしまった結果だと考えられます。カワのような典型的な普通名詞でさえ，唯一のもの（固有名詞）に使われていると，アイヌ語のナイ，ベツ，日本語のフチ，セ，サワ，タニ同様，単なる語尾となり，結局，固有名詞の一部となっていきます。

モモセ（百瀬），アヤセ（綾瀬），セガミ（瀬上）

あるいは東京の古い地名としての瀬田谷（セタガヤ）のセ（瀬）の意味は，今や，「浅瀬」，「瀬替え」（治水などのため川筋を人工的に変えること），「瀬を早み」（詞花集）のようになにか前後があってようやくその輪郭がわかります。古代の日本語には重要な単音節語がかなりあったはずですが，多くはこのように固有名詞化したり，より長い複合語の一部となっています。

内（ナイ）＝川として，秋田県内にみられる相内（アイナイ）のアイと合川（アイカワ）のアイは同じものでしょうか？　山梨県の「日川」のヒ，これに意味上対応するような秋田県の「比内」（内＝川）のヒはどうでしょうか？　比内のヒがアイヌ語のピ（小石）であるとすると，秋田県北部・小坂町の地名「砂子沢」はアイヌ語「比内」の正確な日本語訳（内＝沢）ということになります。

日川のヒは何でしょうか？　ちなみにヒの音韻（意味に関係する）は上代特殊仮名遣い表では，日と比のヒ（ピ）は同じ甲ヒです。

固有名詞語源研究の面白さは，こうして固有名詞の構成要素の中に，以前は普通名詞として使われながら，忘れられてしまった語，古い日本語の痕跡を再び見いだせることがあるからです。

利根川[3]の語源

桐生川は，足利市で渡良瀬川に合流し，この渡良瀬川は埼玉県の，茨城県との県境の町，大利根町で日本有数の大河である利根川に合流します。北の「奥入瀬」は三沢と八戸の間で太平洋に注ぎますが，「渡良瀬」の河口はこのように海岸ではなく，内陸にあります。渋川で吾妻川，高崎で烏川というかなり大きな川を合せて太っていく坂東太郎・利根川は，赤城山をはさんで桐生の反対側を流域としています。北関東，南関東という呼び名は，この川を境にしたものです。この川の前橋までの流域には，吾妻川（アガツマガワ），片品川（カタシナガワ），片品川支流の，利根川を逆にした根利川（ネリガワ），沼田で利根川に直接注ぐ，四釜川（シカマガワ），発知川（ホッチガワ）といった，私の興味を引く川がたくさんありますが，その語源についてはあとの機会にまわし，ここでは利根（トネ）という語についてだけ考えてみます。

利根川（トネガワ）は，万葉集東歌には刀禰河泊（3413 歌）と書かれた例がありますが，この表記からはこの川が「トネカハ」と言われていた以上のことはわかりません。群馬県の地名について書かれたもののなかに，トネを，母の枕詞「垂乳根（タラチネ）の」のチネ（乳）に関係づけたものがあり，この川が流域に与えて来たさまざまな恩恵からして，長いあいだ信じていましたが，いまは疑問をもっています。この川は母なる川であった以上に，人に苦痛を与えた暴れ川（坂東太郎）であったということと，木（キ・コ），火（ヒ・ホ）はあるものの，乳（チ・ト？）の交替にはなにか不自然さを感じるからです。

このほかアイヌ語の「長い」tanne からという新村出説があります。しかしこの川が日本屈指の長流でも，最初に名付けた人々は旅行者でも，探検者でもなく，おそらく特定の地域（かなり広いに違いないが）に密着していた人々なのですから，こうした飛行機によるような俯瞰的視点は不自然です。

アイヌ語の湖沼（to–ne, to は湖沼，ne は断定辞）説は，水源地域を言っているのであれば，一考に値するかもしれません。桐生川の場合に見たように，河川名は川そのものより，流域を指している場合があり，利根川が発している群馬県最北部の地方は，尾瀬に接した「利根（トネ）」と呼

ばれる広い水の豊富な地方だからです。ここでも，この地方名が河川名になったのか，あるいは河川名が地方名になったのかという問題が生じますが，桐生川の場合のように，おそらく河川を含む流域全体を指したものを最初「トネ」と言ったのではないかと思います。

さて利根川は，1800 メートルを越える丹後山の山あいから発していますが，その丹後山から南西に 30 キロほど離れたところに谷川という名の，登山家には有名な山があります。このトネとタニは仮名で書くとなんの共通点も見えませんが，tone/tani とローマ字表記にすると，子音が二つとも共通しているという，言語比較には大変興味深い事態が見えてきます。タニについては前に言いましたが，川と同じ意味で用いることがありました。したがって谷川は「谷の川」という客観的観点よりむしろ，この水のある場所をほとんど同じ意味の語を用いて，繰り返し強調したものかも知れません。

また前に示したようにア列音とオ列音は相関していることを思えば，タ（ニ）とト（ネ）の関係は，サ／ソ，カ／コとおなじものと考えられます。上代以前の原始日本語の母音のエはア・イの結合（乙エ）か，イ・アの結合（甲エ）からなると考えられます。利根のネが甲エ，つまり，ニと強意のアの結合とすれば，タニ（ガワ）とトネ（ガワ）の関係はタニとトニの対立だけになります。つまり谷川と利根川の意味は，似たようなものではなかったかと，私は言いたいのです。

ユーカラアイヌ語には toni, tani（あちら，こちら）という語があるようです（田村すず子『アイヌ語沙流方言辞典』）。この二つの指示詞は，それぞれ二つ以上の小辞から成る複合語ですが，フランスのバデール女史の小辞研究(4) によれば，基本的普通名詞の多くは指示的な小辞からなるそうです。古い時代のヒトの発想を考えた時，この説は，川は長いから指し示すのに「長い」という意味の語を用いるとか，人々に滋養を与えるものであるから「乳」がふさわしい，といった耳にやさしい語源説より，説得力があるように私には思えるのです。

谷川地方と利根地方を隔てた 30 キロの距離は，昔のヒトだったら充分，一日で歩いて往復できる距離だったでしょう。アフガニスタンやブータン，ネパールの人たちをみると，我が国にそのような時代があったことは容易に想像できるのです。少し高い山に登ったら，30 キロ先は視覚の範囲内です。縄文時代からこの地帯にはヒトが住み，同じ文化圏だったに違いありません。トニ（あちら），タニ（こちら）と言ってお互いの住む，水の豊かな場所を呼び合ったのです。

注

（1） 日本語動詞の活用において，連用形に存在動詞 wu がついて終止形が形成された，という説の詳細は，拙著『日本語はどこから生まれたか』（ベスト新書）の七章「日本語動詞の形成」を参照して下さい。

（2） 日本の山岳名には河川・沢名を基にしているものが少なくありません。例えば，新潟，長野県にまたがる群馬北部の山岳地帯だけでも，谷川岳，水沢山，阿能川岳，大津川山，小沢岳，柄沢山，白沢山，幽ノ沢山，水長沢山，赤沢山など。

（3） 山梨県増穂町に流れ込む川に，同じ「利根川」があります。この川の語源も不明ですが，増穂町のもう一つの川，「戸川」との関わりが考えられます。

（4） フランソワーズ・バデール博士の小辞研究については，前掲書『日本語はどこから生まれたか』を参照して下さい。特に，95，177，192 ページ。

（2007 年 1 月 12 日論叢事務局受理）